

# 北大東島における糖業と小作地の展開

平岡昭利

## 1. はじめに

沖縄本島の東方およそ360km、太平洋上に点在する大東諸島は、南大東島、北大東島、沖大東島（ラサ島）からなる。いずれも無人島であったが、明治中期に探検が行われ、その後、日本の資本主義の展開の中で、一独占企業が占有する Single-enterprise-island として産業上、重要な島嶼となった。筆者は、これら島々に注目し、その歴史的展開について報告を行ってきた<sup>1)</sup>。ただ、これまで北大東島については、一次資料がほとんど存在せず、多くを言及することが困難であった。だが、近年、いくつかの資料を入手したので、開拓から第二次世界大戦前までの糖業や小作地の状況について復元し、整理を行ってみる。

## 2. 開拓の進展と糖業生産の展開

### (1) 開拓の進展

玉置半右衛門による南大東島の開拓着手（明治33年）以降、同島の開拓は急激に進み、大正4年には開墾総面積1585町歩に達した。無人島が製糖の島に一変したのである<sup>2)</sup>。

南大東島に対して、北大東島は玉置半右衛門が同じく借地権を得たものの、開拓未着手のまま放置された状況であった。このため新たに同島の借

地権を獲得しようとする者が現われ、玉置商会は、明治36年、急きよ、社員数名を派遣し、形式的にわずかばかりを開墾し、サトウキビを植え付けた。だが、依然、無人島の状態にあった。

明治41年（1908）、玉置商会は北大東島での燐鉱採掘を計画し、43年から開始したが、アルミナ含有量が多いことや技術的な問題があり、翌44年には採掘を中止している。

開拓は燐鉱事業の失敗と同時に本格的に着手した。島の中央部の池之沢を拠点とし、幕上（内側防風林の外側）の西村を開墾し、サトウキビを植えてさらに東村へと拡大した。大正元年度には初めて製糖を行い、白下糖1945丁を生産した。その後、サトウキビ栽培面積は急速に増加する。

大正5年（1916）南北大東島の経営は、玉置商会を買収した東洋製糖会社によって設立された大東島拓殖会社へ移り、大正7年、その会社を東洋製糖が合併するという不可解な経過をとった<sup>3)</sup>。このような経営の変化の中で、北大東島の農業について

「大正元年以降大正六年度迄ハ、玉置商会及会社ノ農場トシテ、蔗園耕作製糖等一切直営ナリシカ、蔗園ノ拡張ト共ニ製糖工場箇所ノ増加スルニ従ヒ、統一不便ヲ感スルニ至リタルヲ以テ、先ニ南大東ニ於テ白下製糖ヲ行ヒ居リシ当時ノ例ニ倣ヒ、大正七年度ヨリ小作制度ニ改メ、池ノ沢事務所ニ農務係ヲ置キ、蔗園耕作製糖ニ付

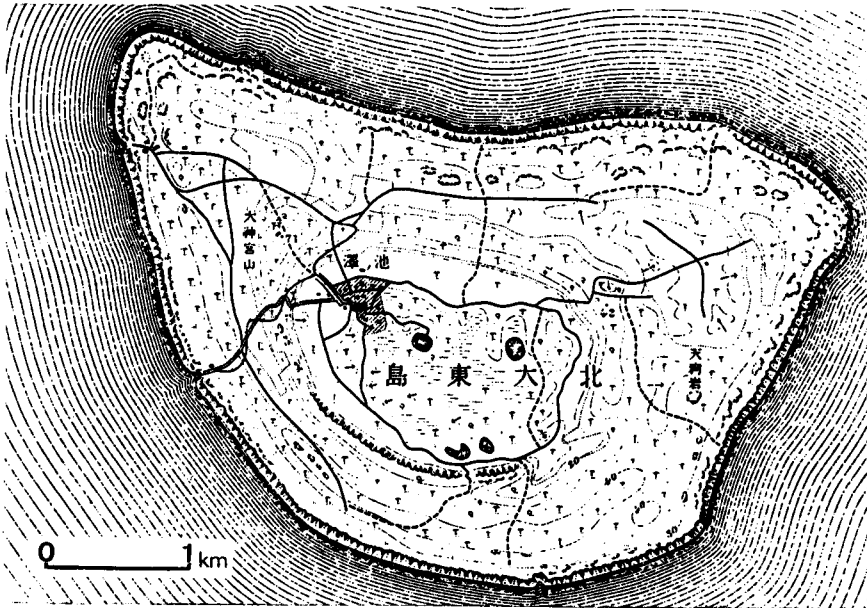


図1 大正前期の北大東島  
(5万分の1地形図「南大東島」大正6年測量)

小作人指導ノ任ニ当ラシム。然ルニ大正九年以降、糖界頗ル不況ニシテ経営困難ニ陥リタルタメ、従来ノ農務係ヲ廃シ、大正十年度ヨリ島内小作人ヲ以テ、会員トスル産業自治組合ヲ組織シ、理事、書記、委員ヲ置キ、事業指導ノ任ニ当ラシム。組合費ハ組合員ノ負担ニ帰セシメ、同時ニ会社ハ小作料ヲ軽減シタリ。……<sup>4)</sup>

と、直営から小作制度へ、また、会社の農務係による蔗作と製糖の指導から産業自治組合による指導へなどの経緯が述べられている。

この中で開拓当初から大正6年までは、玉置商会の直営で、大正7年から小作制度としており、『南大東島の甘蔗農業視察報告』も「北島の開墾は全部会社の直営にして、伐採、焼払い、下刈、穴掘り、植付、町当100円を要せしと云ふ 賃金1人47銭とす。<sup>5)</sup>」と述べている。

だが、開墾の会社直営に関しては、小作農民か

らの請願書に「開墾実費」支払いがあることや、大正7年の東洋製糖の社内資料<sup>6)</sup>に

- 一、南村会社開墾地植付蔗苗代支払の件
- 二、開墾実費支払の件
- 三、小作地開墾地植付蔗苗代支払の件

とあるものの、実際、これらの費用は支払われていないと思われる。

すなわち、会社直営にすると開墾費用からサ

トウキビ栽培費用まで支払わなければならない、莫大な資金が必要となってくる。会社にとっては、南大東島と同様、小作制度として開墾費用などを支払わない方が有利であったと考えられる。

なお、集落については、明治末の開拓当初から、島の中央部の池之沢に集村を形成していたが(図1の地形図参照)、開墾の終了した大正末には散村化しており、農業経営上の距離の効率化を図っている。

## (2) 糖業生産の展開

大正元年度の製糖以来、産糖高も表1のように伸展し、小作農民(親方)も、大正6年の66名が大正14年には216名と増加した。また、「仲間」と呼ばれる農業労働者を、沖縄より毎年200名ほど導入し、雇用労働力として農家に割り当て配分した。このため農業の集約化は進むものの、生産費が増大し、農家は困窮することとなる<sup>7)</sup>。

北大東島における糖業と小作地の展開

表1 糖業生産の推移

年 期	サトウキビ作 付面積(町)	総 産 糖 量	白下糖	赤 糖	黒 糖	小作農の 所得(円)	一丁当たり 所得(円)	備 考
大正 1～2年	52.73	1,945丁	1,945丁					小作料 4 割
2～3年	95.06	1,306"	1,306"					"
3～4年	100.40	1,729"	1,729"					"
4～5年	110.00	3,062"	3,062"					"
5～6年	151.37	4,477"	4,477"					"
6～7年	205.81	2,208"	2,208"					"
7～8年	468.37	8,295"	8,295"			103,767.17	12,508	"
8～9年	477.90	5,423"	5,423"			73,234.74	13,437	"
9～10年	513.47	8,422"	8,422"			36,048.93	4,395	"
10～11年	535.44	11,759"	11,571"	91俵	137丁	68,686.93	5,841	幕上 2.5 割 幕下 3 割
11～12年	543.44	16,497"	9,820"	9,317"		181,319.16	10,991	"
12～13年	538.67	19,858"	10,618"	12,936"		158,419.69	8,028	"
13～14年	536.00	9,574"	9,574"			64,488.78	6,735	"
14～15年	516.50	9,714"	6,394"	4,818"		57,250.55	5,893	小作料 3 割
昭和 1年～2年	520.00	17,190"	17,194"			91,588.32	5,328	"
2～3年	520.00	21,121"	21,121"			109,829.20	5,200	"
3～4年								"
4～5年								"
5～6年								"
6～7年		17,020丁			17,020丁			"
7～8年		10,313"			10,313"			"
8～9年		14,196"			14,196"			"
9～10年		10,980"			10,980"			"
10～11年	374.24	1,204,858斤			1,204,858斤			"
11～12年	342.92	1,525,324"			1,525,324"			"
12～13年	362.50	2,087,354"			2,087,354"			"
13～14年	327.41	1,965,153"			1,965,153"			"
14～15年	317.22	1,732,445"			1,732,445"			"
15～16年	303.24	1,251,127"			1,251,127"			"
16～17年	298.72	818,381"			818,381"			"
17～18年	230.49	1,553,130"			1,553,130"			"
18～19年	273.60	939,344"			939,344"			"
19～20年	143.70							"

(付記) 総産糖量は黒糖、赤糖は140斤で白下糖1丁と換算している。昭和2年以降、黒糖は1丁120斤、白下糖は140斤に統一。  
 (資料) 東洋製糖株式会社、大日本製糖株式会社の社内資料、『北大東村誌』より作成。

表2 昭和2年期の製糖組合と労働力構成

地 域	製糖組合	製糖工場	役 牛	小作農家	勞 働 力			1小作農当たりの自家労力	1小作農当たりの雇用労力
					自家労力	雇用労力	合 計		
池ノ沢	12	25	69	26	男 33 人 女 30 "	男 124 人 女 10 "	男 157 人 女 40 "	2.42人	5.15人
丸山	4	14	24	17	男 18 " 女 15 "	男 35 " 女 1 "	男 53 " 女 16 "	1.94 "	2.12 "
西村	6	17	34	19	男 23 " 女 18 "	男 60 " 女 12 "	男 83 " 女 30 "	2.17 "	3.79 "
東村	9	29	58	32	男 36 " 女 33 "	男 88 " 女 16 "	男 124 " 女 49 "	2.16 "	3.25 "
南村	12	38	84	43	男 46 " 女 43 "	男 114 " 女 14 "	男 160 " 女 57 "	2.07 "	2.98 "
合 計	43	123	269	137	男 156 " 女 139 "	男 421 " 女 53 "	男 577 " 女 192 "	平 均 2.15 "	平 均 3.46 "

(資料) 大日本製糖株式会社の社内資料により作成。

加えて、第一次世界大戦時の好況が終わり、不況にみまわれ、糖価が下落し、1丁当たりの所得は大幅に減少した(表1)。会社は小作料を引き下げ、従来4割であったものを、大正10年(1921)には幕上(内側防風林の外側)2.5割、幕下(内側防風林の内側)3割と減額し、さらに大正14年からは一律に3割としている。

昭和2年(1927)金融恐慌で親会社の鈴木商店が倒産し、東洋製糖は大日本製糖に吸収合併されたが、南北大東島の経営は、ほぼ従来通りであった。同年の製糖組合と労働力構成は表2であり、小作農家数は137名と大正14年の216名から大きく減少している。これは農家の経営が苦しいため、1戸当たりの小作地を拡大したことによる。製糖組合数43、畜力製糖工場123、1組合当たりの工場は2.9であった。労働力をみると、出稼労働者の農夫(仲間)は全体で474人が導入され、小作農家1戸当たり平均3.46人であるが、小作地の広い池ノ沢地区では平均5.15人を雇用している。

### (3) 製糖法と製糖実績

北大東島の製糖は、南大東島の大型分密糖工場とは異なり、開拓以来、畜力利用の圧搾機を利用したものであった。

「甘蔗圧搾機ハ鑄鉄製三連堅型ノ「ロール」(中央ノモノヲ中玉ト称シ、両側ノモノヲ脇玉ト称ス)ヲ木枠ノ中ニ組立テ、楔ヲ以テ「ロール」間隙ヲ加減シ、役牛ヲ動力トシ、中玉ノ回転ト同時ニ齒車ノ噛合ニヨリ、二個ノ脇玉ヲ回転セシメ、機械ノ両側ニ対座スル喰セ方ハ、蔗茎ヲ「ロール」間ニ挿入シ、二回圧搾ヲ行フ。竈ハ四個ノ煎糖釜ヲ連ネタルモノニシテ、圧搾汁一石三斗(一繰ト称ス)ニ達スレバ、之レヲ一番釜ニ移シ、煮沸シ石灰ヲ加ヒテ汚物ヲ除去シ清澄ヲ行フ。清澄糖汁ハ、二、三番釜ニ移シ、漸次炊キ詰メ、四番釜ニ於テ約百十五度迄煮沸シ、適当ノ濃度ヲ見計ヒ、之ヲ化装鉢ニ汲ミ上げ結晶セシメ後糖樽ニ納ム。<sup>8)</sup>」

であり、製糖実績は1繰(1石3斗)について

## 北大東島における糖業と小作地の展開

甘蔗斤数	773斤
搾汁斤数	402斤
糖汁容量	1石30
搾汁歩留	52%
白下出来高	60斤
原料ニ対スル白下糖歩留	0.078
白下1丁ニ要スル原料 <small>(1丁ノ正味斤量 ヲ140斤トス)</small>	1800斤
白下1丁ニ要スル糖汁 <small>(1繰81石3斗)</small>	2繰33

であった<sup>9)</sup>。

製糖作業は1日15時間、小作農家3～4戸で1製糖組合を組織し、共同で白下糖を、昭和5年度より黒糖を生産した。製糖組合の平均製糖高は500丁、製糖用の役牛数は6頭、製糖用の労力は13.7人であった<sup>10)</sup>。

### 1 製糖組合の平均労力の配分は

白下製造人	1人
火夫	1人
燃料乾燥方	2.7人
牛方	1人
喰セ方	2人
山方	4人
飼葉方	2人
計	13.7人

であり、1日の製糖能力は、圧搾繰数8繰、製糖高(ブリックス15度の糖汁にて)3.5丁であり、1日の製糖費(1日製糖高を3.5丁として)は、

役牛使役賃(1繰50銭として)	4.00円
労力費 <small>(労力13.7人に対して1日 平均80銭の賃金として)</small>	10.96円
需用品消耗品修繕費	1.00円
計	15.96円
1丁当製造費	4.56円

であった<sup>11)</sup>。

以上のような畜力圧搾機による製糖は能率が悪

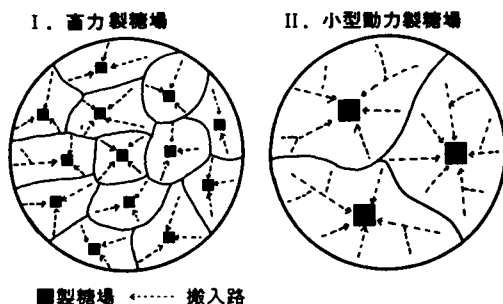


図2 製糖場と搬入圏の空間的展開

く、生産費に占める製糖費の比率が高くなるため農家の手取金は少なかった。製糖場の改良が、東洋製糖時代から幾度も検討されてきたが、昭和4年(1939)に至って、やっと石油発動機を動力とする改良製糖場が設置され、図2-IIのパターンを示した。また、「昭和5年以来利潤多キ黒糖製造ニ転換スルニ至レリ。<sup>12)</sup>」とこれまでの白下糖から黒糖生産に変わった。

## 3. 出身地と小作地面積

### (1) 社会階層と出身地

社会階層は、農業指導や鉱山の監督にあたる会社社員を頂点に、小作権をもつ「親方」、さらに農業労働力としての「仲間」(農夫)や、鉱夫の3階層に大きく区分された。

これらの社会階層を大正15年の職業別人口で見ると表3の如くである<sup>14)</sup>。会社の社員が26人で3.3%、その出身地は全国に及んでいるが、南大東島製糖所とは異なり<sup>13)</sup>、沖縄出身者が多く、10人を占めていた。現業員は、現地採用の会社の従業員で38人中28人が沖縄出身者で、次いで八丈島出身者の7人であった。

小作農である親方は、開拓当初、すべて八丈島

表3 大正15年の職業別人口 (人)

	人 数	家族を含めた家族人数		
		男	女	計
会 社 社 員	26	50	38	88
現 業 員	38	59	61	120
小作(親方)	153	382	356	738
芋 小 作	17	41	25	66
農夫(仲間)	242	273	76	349
鋤 夫	292	403	256	659
漁 師	15	24	21	45
そ の 他	16	30	31	61
合 計	799	1,262	864	2,126

(資料) 東洋製糖株式会社の社内資料より作成。

(小笠原島を含む) 出身者であったが、沖縄出身者も増加し、表4のように大正6年には八丈島出身者が21人に対し、沖縄出身者は43人(65%)となった。沖縄県内では沖縄本島北部の名護市、本部町、大宜味村と久米島(仲里村・具志川村)の出身者が多かった。大正14年(1925)には、親方(小作農)216人のうち180人(83%)が沖縄出身者で占められ、八丈島出身者34人(16%)の比率は低下した。沖縄県内では名護市22人、本部町20人、大宜味村19人と久米島(具志川村・仲里村)11人、国頭村8人の順となり、大正6年と同じ出

表4 小作農(親方)の出身地別人口 (人)

大 正 6 年		大 正 14 年		昭 和 12 年	
八 丈 島 20	沖 縄 県 43	八 丈 島 32	沖 縄 県 180	八 丈 島 14	沖 縄 県 73
小 笠 原 島 1	名 護 市 3 本 部 町 3 大 宜 味 村 2 仲 里 村 2 具 志 川 村 1 国 頭 村 1 那 覇 市 1 浦 添 市 1 不 明 29	神 津 島 1	名 護 市 22	新 島 1	本 部 町 16
奄 美 大 島 1		新 島 1	本 部 町 20	奄 美 大 島 1	名 護 市 13
愛 知 県 1		奄 美 大 島 1	大 宜 味 村 19	鹿 児 島 県 1	大 宜 味 村 12
		鹿 児 島 県 1	国 頭 村 8		国 頭 村 5
			伊 平 屋 村 7		仲 里 村 5
			今 婦 人 村 6		今 婦 人 村 4
			具 志 川 村 6		具 志 川 村 3
			仲 里 村 5		浦 添 市 2
			与 那 城 村 4		与 那 城 村 2
			伊 是 名 村 2		金 武 町 2
		浦 添 市 2		大 里 村 2	
		具 志 川 市 2		佐 敷 町 2	
		知 念 村 2		那 覇 市 1	
		大 里 村 2		伊 平 屋 村 1	
		金 武 町 2		具 志 川 市 1	
		那 覇 市 1		中 城 村 1	
		南 風 原 町 1		読 谷 村 1	
		読 谷 村 1			
		佐 敷 町 1			
		勝 連 町 1			
		北 谷 町 1			
		玉 城 村 1			
		不 明 64			

(資料) 東洋製糖株式会社、大日本製糖株式会社の社内資料、『土地積算台帳』、『北大東村誌』編集委員長 島田清四郎氏の聴取により作成。

## 北大東島における糖業と小作地の展開

身地からの小作農が増加している。開拓期の小作農の出身地を核として増えたものであろう。なお、芋小作は、海岸地域で1町歩未満の小作地に、食糧やアルコール原料のためのサツマイモや麦を栽培した。すべて沖縄出身者であった。

農夫である出稼労働者の「仲間」は、242人中、240人が沖縄出身者であり、契約人夫、呼寄人夫、元小作に分けられた。契約人夫は2カ年と1カ年契約があった。呼寄人夫は自家労力として主に親類や家族であり、元小作は会社に土地を返還しても、借金などの事情で島に残って農務に従事した。

鉦夫は、燐鉦採掘に請負制度によって従事するもので292人中288人が沖縄出身者であった。農夫も労務調整から非製糖期には鉦山で働いており、大正15年は元小作30人、契約人夫59人、呼寄人夫10人の99人を数えた。

この他の職業としては漁師15人、官吏2人、樽工3人、床屋3人、市場2人、風呂炊き2人などであった。

### (2) 小作地面積と分布の階層的特徴

次に出身地別の小作面積を検討すると、表5のようになる。草分け島民といえる八丈島出身の小作農の耕地は広く<sup>15)</sup>、大正14年における最上層といえる小作地5町歩以上の農家15戸のうち7戸は八丈島出身者であり、上位5位までを独占した。八丈島出身の小作農には2町歩以下層がないのに対し、沖縄出身の小作農の8割が、零細な3町歩以下であった。

加えて沖縄出身者の小作地は、図3のように幕上の塩害の被害が大きい周辺地域や島の中央の沼地に展開しており、極めて土地条件が悪かった。

これに対して、八丈島出身者の小作地は、すべて肥沃な幕下に展開しており、沖縄出身の小作農

表5 出身地別の小作地階層 (大正14年)

	八丈島	沖 縄	そ の 他	合 計
5 町 以 上	7	7	1	15
4 町～5 町未満	9	11		20
3 町～4 町 "	9	17		26
2 町～3 町 "	9	101	1	111
1 町～2 町 "		39		39
1 町以下		5		5
	34	180	2	216

(資料) 大正14年『土地積算台帳』により作成。

と八丈島出身の小作農との格差は、小作地面積以上の大きな隔たりが存在した<sup>16)</sup>。

なお、沖縄出身者の出身別の小作地についてみると、島の南部と中央部(湿地帯)は、本部町、名護市、大宜味村など沖縄北部の出身者の小作地が多く、島の北部では久米島出身者の小作地が目立った。島の南西地域の甘藷小作地は、すべて伊平屋島と伊是名島出身者で占められていた。小さな島ではあるが、同郷の出身者が集合する傾向がみられる。

また、耕地区画をみると、八丈島出身者が展開する地域の耕地は、一筆一筆が極めて広いのに対して、沖縄出身者の小作地は極めて小さく区分されている。土地条件の良い耕地ほど区画が大きく、土地条件の悪い耕地ほど区画が小さく、零細であるといえる<sup>17)</sup>。

以上のような小作地と小作農との関係は、固定したものではなく、資金の蓄えができれば、営農の安定を望むことから広く土地条件の良い耕地を求め、島の外縁地域に居住する小作農は少しでも内側へ、島の中央部の丸山(湿地帯)の小作農は、少しでも外側へといった居住移動がみられたのである。(図4は移動の模式図)

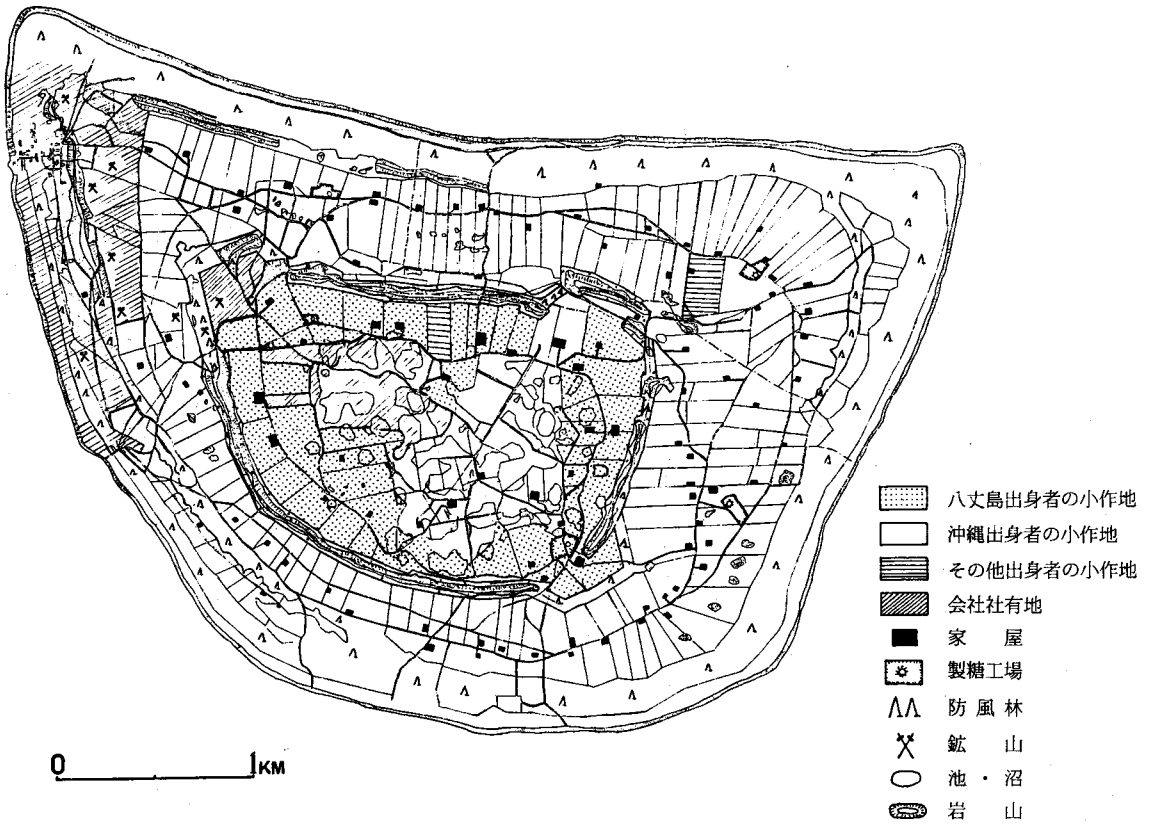


図3 出身別小作地と家屋の空間的展開

#### 4. あとがき

本稿は、北大東島の開拓からの糖業や小作地の展開について、会社の社内資料や土地台帳をもとに、明治末期～昭和前期までの状況を整理したにすぎない。この作業の背景としては、限られた資料の中で、北大東島の糖業を復元、データ化することにより、今後、沖縄や台湾などの糖業と比較し、南北大東島の糖業の位置付けを行っていきたいということがある。

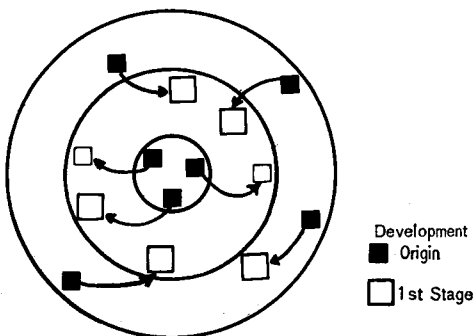


図4 小作農民の移動パターン (模式図)

② 散村成立後の幕下と呼ばれる土地条件の良い耕地への移動を示している。

#### 〔付 記〕

『北大東村誌』を編集された、那覇在住の島



## 北大東島における糖業と小作地の展開

田清四郎先生には、長年にわたり御教示をいただいております。ここに記して感謝を申し上げます。

### 注

- 1) 平岡昭利：大東諸島の開拓とプランテーション経営——その歴史的展開を中心にして——、人文地理、29巻3号、1976。  
平岡昭利：南大東島における外国人労働力の導入と展開。地理学評論、51巻4号、1978。  
平岡昭利：サトウキビ農業における外国人労働者の導入と実態。南九州地域科学研究所報、3号、1986。この論文はサンゴ礁地域研究グループ：『日本のサンゴ礁地域2 熱い心の島——サンゴ礁の風土誌』古今書院、1992. に所収。  
平岡昭利：沖大東島（ラサ島）の領土の確定と燐鉱採掘。長崎県立大学論集、25巻、3・4号、1992。
- 2) 江崎龍雄編：『大東島誌』1929. に詳しい。
- 3) この買収については、重要な問題を含んでおり、別に論ずるつもりである。
- 4) 平岡昭利：『北大東島ノ糖業』資料。長崎県立大学論集、26巻2号、1992. pp111~112.
- 5) 柳沢秀雄：『南大東島の甘蔗農業視察報告』。1926. p 62.
- 6) 東洋製糖株式会社 社内資料。『北大東村誌』1986. pp154~155に詳しい。
- 7) 『北大東村誌』1986. p 164.
- 8) 9)10)11) 前掲注4)
- 12) 平岡昭利：資料『大東島概況摘録』。長崎県立大学論集、27巻2・3号、1994. p 573.
- 13) 東洋製糖の南大東島製糖所には、沖縄出身の社員はわずかであった。
- 14) 昭和7年の状況は次の論文に掲載されている。山成不二磨：沖縄県北大東島鉾山。地学雑誌。45年。527号、1933.
- 15) 南大東島の小作地に比べると、非常に小さい。
- 16) 南大東島と同様である。
- 17) 荒井久彌：土地の等級別所有とその密集・分散性向における階層的偏差について。農業総合研究、11巻3号、1957. の結論があてはまる。